

あざ岩



落合と銭亀の境、坊主平へ登る道に、松の林がある。その松のもとに、黒っぽいこけむした大岩があり、ちんびくたいやしるが、申しわけのように建てられている。ぜにがめの人々は、この岩のことを、あざ岩といたり、いぼ岩とよんでいる。

今からおよそ七百年も前のことである。まだこの附近を鎌倉街道が通っていたところ、秋葉神社の近くに、街道に面して一軒の茶屋があった。

そこに、どえらい大きなあざが顔にある、そりやあみにくい娘っ子がすんでいた。なまえを千代といった。

その茶屋には、ばくち場もあって、旅人やかごかきたちが、たくさん集まってきた。かけごとをやっていた。

近所の人たちは、千代が気だての良い娘だということを知っていたので、千

代の悪口を言うものは、ひとりもいなかった。

ところが、たまに通る旅人やら、ばくちでまけたかごかきたちは、

「ありやなんだな、あの顔は、炭でもついているのか。」

「いんにやいんにや、たんぼ仕事で、どろでもついているんじやろう。」

などと言って、千代の顔をじろじろ見た。

千代は、できるだけ顔のあざが人にわからんようにしていた。しかし、千代のあざは、そんなにかんたんにかくせるほど、小さなあざではなかった。

男たちは、千代がかくせばかくすほど、おもしろがって、酒くさい息のかかるほど、千代の顔をのぞきこんだ。そして、

「なんだこりやあ、あざかい。」

「こりやまた大きなあざじゃ。」

「なんとも、みつともない顔じゃなあ。」

などと、ずけずけいやがらせを言った。

千代は、そのたびに、

「なんでおらばっかし、こんなはずかしいめにあわにゃならんのじゃ。」

「早く死んでしまいたい。
と、思っていた。」

また、初めての客の中には、千代がお茶やらいもだんごなどをはこんでいくと、顔に大きなあざがあるものだから、千代の顔を見るなり、にげ出すものがあった。

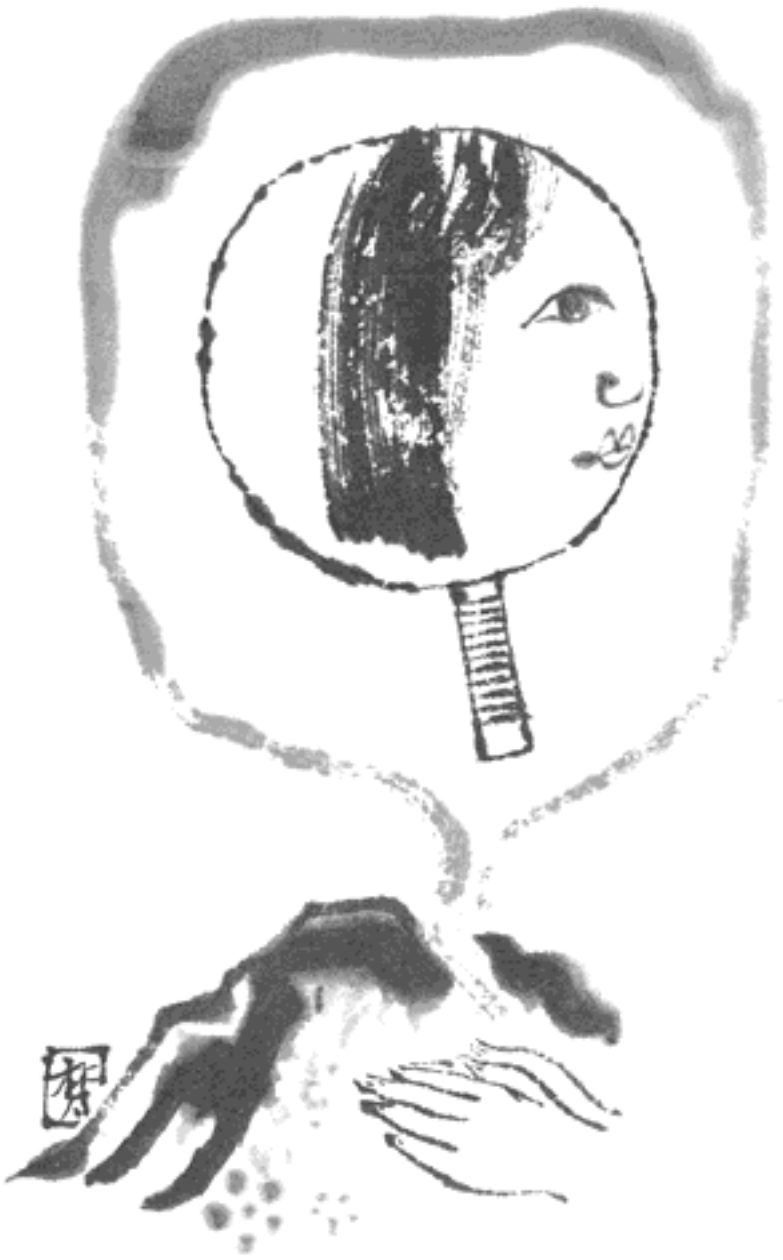
こんなことが、たびたびあったので、千代の親たちは、千代のことをたいそうかわいそうに思っ、あっちのお寺さん、こっちのお宮さんと、ほうぼうおいのりして歩いた。しかし、少しもそのききめは、あらわれなかった。そのうち、親たちは、神だのみをあきらめた。

そして、

「千代のごとは、そなわりもんや。あの子もなんともいわんが、年ごろやし、だいぶ気にしとるようやな。」

「あれで、悪い心でもおこさないがのう。」
などと、ひまあることに話していた。

こうした親の苦しみにもまして、千代のなげきは、そのいく倍も大きかった。



このあざさえなかつたら、本当に幸福だと思った。秋葉様へ毎日のようにおま
いりしたり、人の教えてくれることは、なんでもやってみたが、そんなことで
顔のあざがとれるものではなかった。

とうとう千代は、あざを苦にして、病の床についてしまった。

ある日、千代は、夢を見た。

松林のもとにある大岩に、千代は立っていた。ふと気がつくと、自分の顔の
ようすがなんとなくがう。千代は、なぜか、もっていた手かがみで、自分の
顔を見た。するとどうだ、雪のようにまっ白な美しい顔がそこにある。千代
は、自分の体が軽くなるのを感じた。

こんな夢を見た次の日、千代は、えらくて、なまりのように重い体をひき
ずって、やつとのもので大岩の所へ来た。するとどうだ、顔のあざがなくなる
わけではないのに、千代は夢のことを思い出し、気分が良くなるのを感じた。

その日から、千代は、その大岩に願いをかけることにした。

「自分は、顔のあざのことで苦しんできたが、世の中には、私と同じように苦
しんでいる人が外にもきつといる。そんな人たちをすくってあげたい。」

と、千代は思い、その大岩に願かけをした。

そして、それからというもの、千代は毎日毎日、雨の日も風の日も、焼けつ
くような夏の日も、大岩の所へ行き、おいのりをした。

千代の体は、ますますよわっていった。

そして、ある年の冬、ふりしきる雪の中を、千代は、最後の力をふりしぼっ
て、大岩の所へ行った。

千代が、大岩の所まで来ると、雪はいつのまにかやんでいた。大岩の上に
やつとのもので立って空を見上げると、千代の体から急に力がぬけて来た。千
代は、空を見上げたままぐずれていった。やがて千代が気がつくと、空にはま
んてんの星がちらばり、千代の心をあたたくつつんでくれた。千代はにっこ
りすると、やがて深いねむりにさそわれていった。

いてついた夜空を北の方へスーッと星が流れた。

つぎの朝、雪の中に千代が発見された。

岩にもたれ、千代は、まんぞくそうにほほえんでいた。

こうして、千代は、親たちの手によって、千代のねがい通り大岩のもとにう

められ、ほこらにまつられることになった。

今でも大岩のものとほこらには、小石がたくさん上げられ、いぼやあざのある人が小石をかりてきて、いぼやあざをこするとれると言われている。

ほこらには、ときおり一輪の花がそなえられ、けなげな娘の心をなくさめている。

文・横山 修二

絵・藤原 梵

兄の井 弟の井



むかし、恵那山のふもとの落合村に、二人の兄弟が住んでおったそうなの。今から七百年くらい前、鎌倉時代のことだなの。

このあたりは、川が深く谷をえぐって流れておつての、田んぼはいくらもできなかつた。それで、村の人たちはの、木曾谷や伊那谷へ荷物を運ぶ仕事をしては日銭をかせいでおつた。けれども、地頭や名主からの年貢の取りたては年々きびしく、くらしは苦しくなるばかり。誰もが、もつと田んぼがあつたならと思つておつたが、見まわせばまわりは山ばかり、こんなところへどのようなして水を引いたらよいのか、見当もつかなんだと。

ところが、この二人の兄弟はの、何とかしてこの村に水を引いて田んぼをふやしたいものだと、本気で考えておつた。

ある晩のこと。一日の仕事を終えてやっと床についたとき弟がいった。

「なあ、兄さ、日銭かせぎはあてにはならん。今年のように雪が多ければ仕事がないし、このままではともやっっていけんわ。何とかして水を引いて田んぼをふやそうやないか。」

すると、兄の方も、
「うん、わしもこの間からそのことを考えておったところよ。水さえ引ければ田んぼがふえる。田んぼがふえれば、米もたんととれる。」

「うん、たんととれりや、年貢を出しても少しは余る。そうすれば、村の人たちもどんなに助かることか。」

「そこで、この間から見ておいたんやが、釜沢の上流から水を引けば、山の上の方の高いところにも田んぼができるのやないか。」

それを聞いた弟が、
「いや、兄さ、それは無理や。山の上の方までも水を引けるわけがない。わし
が思うには、中腹あたりの山の腹をまいて水を通したらどうや。そうすれば
山の半分から下ぐらいは、田んぼに出来る。」

といえば、兄は、



「いや、それぐらいでは足りんぞ。どうしても上の方まで水を引かんと。」
と、ゆずらなんだと。

「どうやってあんな高い所に水を引くのや。あの急にタアツと降りて登らんなんとこは、どうするのや。」
「ううむ。」

そこで二人は考えこんでしまったと。

それからというもの、二人の兄弟はの、仕事の合い間をみては、水の取り入れ口はどこにするか、どこを通して、どのように工事をすすめたらよいかと、調べてまわったそう。そうして、とうとう二人は、用水を二本つくることにしたと。

もちろん、こんな大工事は、二人だけでは出来ん。そこで、秋のとり入れがすむと、二人は、さつそく村の人たちに相談したと。ところがの、

「水は高いところから低いところへ流れるもんや。そんなとんでもないこと、出来るはずがないわ。」

「そりゃあ田んぼはほしいけど、川から山へ水を引くなんて、夢でもみたのや

ないか。」

と、誰も相手にしてくれん。

「かりに水が引けるとして、いったい何年かかるのや。」

「そんな大仕事をやっとなら、百姓がでんやないか。」

「そうや、そうや、みんな、田んぼができる前に死んじまうわ。」

用水を引くことは誰もが願っていることなのに、村の人たちはの、この兄弟の計画を聞いて、とても出来ることではないと思ったのや。

けれども、兄弟はあきらめきれんので、仕方なく二人だけで工事を始めた。「どうせ、途中でやめるくらいのことや。」

「ばかなこと始めおつて。そんなひまに銭をかせがにや、年貢も出せまいに。」
と、村の人たちは本気で考えてはくれなんだ。

なかには、兄弟のことを心配して、

「そんな大仕事、できるこつぢやない。今のうちにやめんさい。」
といいにくる人もいたと。

けれども、兄弟は、毎日夜があけるから日が暮れるまで、せつせと用水づく

りを続けたそうなの。たくさんの田んぼができるのを夢みての。

なにしろ、今のようには機械を使うわけやない。つるはしやとうぐわのような道具では、なかなか工事もはかどらんわいの。それでも、兄は上の方、弟は山の中腹に向って、少しずつ、掘りすすめていったと。けど、よう見たもんやの、釜沢の上の方は山ん田より高いっちゅうことを。

井林の岩まじりのところでは、大へん手こずっての、たった一間掘るのに何日もかかった。こんなふうではいつまで続けれるかと不安になったと。それでも兄弟は、雨の日も風の日も、工事を続けたそうなの。

どうにか井巾まで掘りすすんできたがの、ここから先は曲がりくねったところが多し、高い低いもようわからん。そこで兄弟は、井巾から山の田までを一望に見渡せる、上平の西の端の高いところのぼって見たと。

「兄さ、これからが大へんやなあ。」

「うん、これからがえらいぞ。山ひだがたんとおあるでなあ。」

兄弟は、日焼けした顔を見合っつうなずいた。二人は、向い側の山肌をじっと見つめておったが、高い低いがどうもよくわからん。



「めんば、持ってこい。」

突然、兄が大声で叫んだと。

「めんば？ めんばでどうするのや。」

「うん、めんばに水を入れてはかるぞ。」

兄弟は、大きなめんばに水をいっぱいの水を入れ 向いの山の方にさし出しての、水の水平を我が目でためしながら高低を測量したそう。そうやって水路の位置を決めていったと。それで、今でもこの付近をためし坂とも、思案坂ともよんでおるのや。

二人はまるで憑かれたようにせつせと働いたと。兄と弟が別々の水路を掘っているのだから、なかなかすすまなかったがの、水路は着実にのびていったと。

何年かたつて、山の田の山肌で働く二人の姿が、村からはつきり見えるようになった。「ありやあ、気がいや、たわけや」といつていた村の人たちも、二人の仕事ぶりを見ているうちに、「これは本当に水が引けるかもしれん」と思うようになったと。一人、二人と工事を手伝う者が出てきたそう。

ところが、兄の方は無理がたたつたせいか、用水の完成を目前にして病死してしまつたと。

「もつとはよう手伝つとりやあよかつた。」

村の人たちは後悔し、ねんごろにとむらつたそう。

それからは、村の人たちも本気になって工事に取りくんでの、みんなが手伝つたので、弟の井の方は兄の井よりも工合よく出来たらしいの。兄弟が工事を始めてから、もう七年もたつていたそう。

「水がくるぞ。」

「ほんとうだ。水だ、水だ。」

「田んぼができるぞ。」

きらきら光って流れてくる水に、みんなはおどりあがつて喜んだと。

さて、いよいよ山を切り拓いて田んぼづくりを始めようと、村の人たちが集まつての、弟の考えを聞きながら相談していたときのこと。突然、村に役人がやって来て、弟をどこかへ連れて行ってしまつたと。弟は、それきりもどつてこなんだそう。

役人はの、こんなおそろしい、りこうなやつを村においとしては、何をしかすかわからんといつて、弟を連れていったものらしい。

「用水を引くのが何でおそろしいことか。用水のできたおかげで田んぼができたのに。」

「むごいこつちゃ。用水をつくっただけで、田んぼ一まいもつくれずに連れていかれるなんて。」

つぎつぎとふえていくだんだん田んぼを見ながら、村の人たちは悲しんだ。

それからのち、この二人の兄弟のことをしのび、その業績をたたえての、この用水のことを「兄の井、弟の井」とよぶようになったそう。

文・笠木 由紀子

絵・加藤 公雄

ズイトン先生のきしなうしな

むかし、山中の医王寺に、ズイトンさんというおしょうさんが住んでおったそう。とても気のいいおしょうさんで、村の人たちはもとより、うら山のきつねやたぬきにも、ズイトンさん、ズイトンさんと大へんしたわれておった。さて、きょうも朝のおつとめをすませたズイトンさんは、庭そうじをやっておった。ズイトンさんも年での、このところ、かがんでいると腰が痛いので、ゆっくりとていねいに庭をはいておったそう。すると、本堂のうらの方から何やら苦しそうな鳴き声が聞こえてきた。

「キューン、キューン」

はて、いったいどうしたのだろう。うら手へまわってみると、その声はやぶの中から聞こえてくる。ズイトンさんがやぶをかきわけ行ってみると、何と、一匹のきつねがいかに苦しうなうなっていた。

「おおよしよし、どうした、どうした。」

きつねをそっとだきあげてみると、足に大きなとげがささっているではないか。

「こんなに血が出て、痛かったらうに。」

といいながら、ズイトンさんはその大きなとげをぬいてやった。

「さあ、もうだいじょうぶ。」

そういうと、きつねは、うれしそうにズイトンさんの顔を見ておったが、やがて、びっこをひきひき山の中へ消えていったそうなの。

この山中の医王寺は、落合と馬籠を結ぶ十曲峠の途中にあつて、大へん淋しいところでの、昼間でもきつねやたぬきをよく見かけたそうなの。だから、夜なんぞはまさに動物の世界。お寺がまるで動物たちの集会所のようなもので、いつもちようどズイトンさんが床に入る頃になると、動物たちがやってきて、「ズイトン、ズイトン」

と、大合唱になったそうなの。

なに、ズイトンというのはの、庫裏の戸にしっぽをつけて「ズイツ」とこすつ

てから、「トン」とたたくと、「ズイトン」と聞こえるつちゆうわけさ。

ズイトンさん呼びだしていっしょに遊ぶつもりやったかしらんが、なにしろ夜中のこと、そんなわけにはいかん。ズイトンさんも初めのうちはなかなか寝つけず困っておったが、そのうち慣れてしまつてな、きつねどもがいくらさわいでも、平気で眠れるようになったと。

さて、ある晩のこと。その日は、夕方近くからゴトゴトと戸をきしませる風が吹いていた。もう秋が近いのか、すきま風が肌寒く感じられての、ズイトンさんは何となく寝つけなかった。きつねのさわぐのには慣れっこになっていたのに、雨戸のきしむ音が気になって、うつらうつらしておったと。

そのうちに、ズイトンさんは、はっとした。雨戸の音がさつきとはちがう。耳をすますと、

「トン、トン、トン」

と、玄関の戸をたたく音がする。

これは、いつも私が相手にならんからいたはずらがひどくなったのか、と思つたズイトンさんは、ふとんを頭からひっかぶつた。けれども、

「トン、トン、トン、ズイトン、ズイトン」
と、まだ聞こえるんやと。



うるさくなったズイトンさんは、しかたなく起きて玄関へいき、戸を開けてみた。すると、まあ、この間のきつねが、ちょこんとすわっておったと。

「どうしたんだ、こんな風の晩に。」

びっくりして聞くと、

「おしょうさん、この間はどうもありがとうございました。おかげで傷はすっかりなおりました。お礼に、よく効

くこうやくの作り方を教えてあげましょう。おしょうさんは、腰が痛くて困っているでしょう。」

とっての、ズイトンさんにこうやくの作り方をくり返しくり返し、ていねいに教えてくれたと。

「まず、マムシグサの根っこ、まあいやつをすりつぶす。そこへオオバコのためねとキツネノマゴの葉をすりつぶして混ぜる。次はモチを入れてよくねり合わせる。それと油を、布きれにぬりつけて、痛いところにはれば、たちどころに痛みがとれます。」

ズイトンさんは、きつねの話の話を聞いているうちに、汗びっしょりになっていったそう。いつのまにか、床の中で、こうやくの作り方を何回もくり返していったおつたと。ズイトンさんがこうやくの作り方を一口いうと、きつねがまくらもとでうなずくというふうに、くり返しくり返しして、とうとうこうやくの作り方を覚えてしまった。

と、急に部屋の中が明るくなったので、ズイトンさんは、はっと目をさました。あたりを見まわしたが、きつねの姿はどこにもなく、体じゅうがべっとり

と汗ばんでおったと。もう、夜が明けていたそうなの。

「夢だったのか。」

でも、こう薬の作り方をはつきり覚えておる。ズイトンさんは、すぐに起きて、きつねの教えてくれたものを集めてきた。そして、ならった通りにしてこの薬を作ったの、さっそく自分の腰にはってみると、腰痛がうそみたいになっとなおってしまったと。

よろこんだズイトンさんは、さっそく山門に『御夢想 狐こうやく』と看板をあげ、狐の絵もそこへほりこんだ。

これが、大へんよく効くと大評判になっての、村の人はもちろん、旅人から伝え聞いて遠くからわざわざ買いにくる人が絶えなんだそうなの。

文・笠木 由紀子

絵・高橋 錦子

徳さんのきつねいしやく



むかし、といっても、今から三百年ほど前のことなの。中山道の宿場町落合宿に、十曲峠を越して往き来する飛脚衆がおつてな、その中に一人だけ目立ってよう働く、若くていい男がおつたと。

どこから来たのか誰も知らなんだが、この若者はな、天ぷらや油あげが大好きで、弁当のおかずはたいい油あげが入ったちゅう話なの。そして、まじめで、働き者でな、一日に何十里走っても平気やった。とくに油あげを食べた後は、この若者の右に出る人がおらんくらいよう走つたと。

そんなわけで、この若者は、宿場の人たちに大へん人気があつてな、仕事も一番よけいにあつたちゅうことなの。

ほかの飛脚衆は、この若者ばかり人気があるのでおもしろくない。そのうちに、この若者をねたむ者がでてきた。



「あれは、どうも、ただ者ではないぞ。」

「あれだけの速さで何十里も走れるということは、どうも人間わざとは思われん。」

「天ぷらに油あげが好きということは、ひよっとしたらきつねかもしれん。」

「きつとそうや。」

「こんなうわさをするようになったと。」

「どうや、きつねか人間か、ためしてみたら。」

「そうじゃ、ひとつ化けの皮をはがしてやろう。」

「きつねは、油あげも好きやが、ねずみの天ぷらの方が大好物らしいぞ。」

「そうじゃ、十曲峠の観音様にねずみの天ぷらをそなえておいて、かくれて見とってみよう。」

「もし、人間はよう食べんねずみの天ぷらを、あの若者が食べたとしたら。」

「もちろん、あの若者はきつねということになる。」

「それはいい、さっそくやってみよう。」

相談がまとまって、次の朝はやく、一人の飛脚が十曲峠の観音様に、ねずみ

の天ぶらをそなえておいた。そこへ、飛脚仲間が集まってきてな、まわりのやぶの中にかくれて、この若者が通りかかるのを待っておつたと。

今か今かと息をひそめて待つておるとも知らず、若者は、今日も元気に走ってきた。

「おや、いいにおいがするぞ。」

「おつ、これはうまそうな天ぶらや。」

天ぶらの大好きな若者は、いったん通り過ぎたが、どうもがまんができんで、またもどってきた。さいわい、あたりに人影はなし、とみると、つい手が出て、その天ぶらを食べかけた。

すると大へん。さつきからかくれて見ておつた飛脚衆が出てきて、

「この化けぎつねめ。」

「よくも人をだましたな。」

と、いつせいに飛びかかったからたまらない。なぐるわ、けるわ、もうさんざん。若者は気を失つてたおれてしまった。

むしの息になつて道ばたにぐつたりとしておるところを、ちょうど通りか

かった、徳さんといつてな、大久手の松崎さんの先祖らしいがな、その人が助けてやったちゆうことや。

「こんなひどいけがをして、かわいそうにの。」

徳さんの声で、きつねは少しづつ意識がもどってきたのやと。そこで徳さんは、きつねを家に連れて帰り、きずの手当をしてやった。

「やつぱり、いつまでも人間に化けおおせるものやない。」

しよげて小さくなつておるきつねにな、

「もう二度と人間に化けるでないぞ。」

とやさしくさとして、山へはなしてやったと。

それから何日かたったある日のこと。徳さんの家へ一匹のきつねがやってきた。見ると、この間のきつねではないか。

「この間は、あぶないとこを助けていただいて、ありがとうございました。」

お礼に、きずによく効くこうやくの作り方をお教えます。」

といつてな、こうやくの作り方をくわしく教えてくれたと。

そこで、徳さんは、教わつたとおりに、こうやくを作つてみた。これがよく

効くこうやくでな、またたくまに、すごい評判になったそうや。徳さんは、やがて十曲峠の中ほどに「きつねこうやく」と看板を出してな、薬屋を始めた。きずによく効くというので、大はんじょうしたということや。

なんでも、山いつちや、モーチの木を切ってきて、池すん中へつけといて、二百十日もたったら、皮をむいてな、その皮をたたいちやあもんで、モーチをとってな、次に、たなびら、どじょう、なめくじの黒やきを、炭火で一日がかりでつくって粉にしてな、そのモーチと黒やきの粉とを混ぜてよくねってこうやくを作ったもんやと。それを、まっ白いきれいな布にぬりのばしてな、痛いところへはったもんらしい。

今じゃあ、モーチの木も少のうなって、手に入らんようになってな、あんまり作れんそうやが、今でもこのこうやくは使われておって、なかなかよう効くそうや。

文・笠木 由紀子
絵・高橋 錦子